

イ号方法とK P I 法の試験方法の比較

	K P I 法		イ号方法	
	試 験 方 法		試 験 方 法	
一 次 反 応 の 準 備	試料溶液 0.5M塩化トリウム ↓ 乾燥人血漿希釈液 ↓		試料溶液 ↓ ヒト正常血漿希釈液 ↓	
一 次 反 応	カオリン懸濁液 20分間反応 ↓		カオリン懸濁液 20分間反応 ↓	
LBTIの 添 加	一次反応液 氷水中に保存	反応停止剤のL B T Iを入れる。 (次の反応にいつ移るかは明らかではない。)	直ちに	反応停止剤のL B T Iを入れない。 ①L B T Iの品質により、反応が止まらない場合があった。 ②正確に一次反応20分後、二次反応に直ちに進めるので測定のパラツキが小さくなった。
二 次 反 応	上記液 20分間反応 ↓		一次反応液 20分間反応 ↓	カリジノゲナーゼ標準品を用いる。
二 次 反 応 の 停 止 及 び 吸 光 度 の 測 定	1 % クエン酸溶液 ↓ 遠心分離し上澄について405nmの吸光度を測定		1 % クエン酸溶液 ↓ 遠心分離し上澄について405nmの吸光度を測定	
判 定	405nmにおける吸光度 $A_c - A_r > \text{標準溶液の吸光度 (0.10)}$	p-ニトロアニリン標準溶液の吸光度0.10と $A_c - A_r$ の差を比較し判定する方法	405nmにおける吸光度 $A_c \approx 0.4$ $A_{rB} < 0.04$ $A_r - A_{rB} < A_s - A_{sB}$	判定方法は厚生省の承認を得た方法です。 日本薬局方、一般試験法・吸光度測定法の項に吸光度は0.2～0.7になるように濃度を調節するのが良いと記載されており、 A_c を約0.4と決めた。 使用している試薬が正常かどうかを確認するため A_{rB} を0.04以下と決めた。